中国大運河・シルクロード世界遺産登録記念
中国陶磁器絵画芸術ウィーク～陶風磁韻―中国陶磁器絵画展

生活に溶け込む陶磁器文化

陶磁器発祥の地・中国では、約9千年前の新石器時代から土器が作られ始め、その後各時代と地域の気候風土に合わせて、さまざまな種類の陶磁器が誕生した。世界遺産として有名な秦の始皇帝の兵馬俑は、今から2200年以上前に加彩陶器で作られた等身大の兵士や将軍、馬など約8千体以上が圧巻に配置されている。その後シルクロードや大運河を通じてヨーロッパや海外諸国へと発信されていった。陶磁器はその技術レベル、完成度の高さは各国の文化人を驚嘆させ、陶磁器を英語で「China」と言い、現在の国名の語源ともなった。

日本でもこれら古くからの中国陶磁器の影響を強く受け、その技術を学びに実際に中国へ足を運ぶ人や買い付けに行く人が多く出た。以来、景徳鎮や宜興を始めとする中国の陶磁器は、日本で広く浸透し、人々の生活の中に融け込み、愛用されるものとなった。

今回は、代表的な中国陶磁器について紹介すると共に、中国の人間国宝とも言える中国工芸美術大師・中国陶磁器芸術大師である関宝琮大師にクローズアップし、その芸術創作の世界について触れる。また、今月末から東京中国文化センターで行われる、「中国陶磁器絵画芸術ウィーク～陶風磁韻―中国陶磁器絵画展」の概要と来日画家を併せて紹介する。

中国の陶磁器とは？

中国陶磁の歴史は新石器時代の紅陶や彩文土器から始まり、三彩、白磁、青磁、青花、五彩などの華麗な器を作り出し、世界の陶磁界をリードしてきた。中国では焼成温度が1000度以下の焼物を陶器、1000度以上のものを磁器と呼ぶ。また施釉された焼物を磁器、施釉されてない焼物を陶器と呼び、施釉されていない焼物には土器や炻器などがある。中国では磁器の景徳鎮、陶器の宜興が陶磁器の二大産地といわれている。

関宝琮

魯迅美術学院教授、画家。中国工芸美術大師、中国陶磁器芸術大師、中国美術家協会陶磁器芸術専門委員会委員、中国古陶磁器研究会委員、遼寧省博物館、北京大学会克勒芸術博物館顧問、遼寧省工芸美術協会副会長。

陶芸の世界において、関大師は独りで我が道を行く、独走者と言えるだろう。魯迅美術学院で絵画を、景徳鎮陶磁器学院で彫刻を学び、その後陶芸に身をささげる事になった彼だが、今後の陶芸世界の中でますますその力を発揮し、自由自在に自身を表現していくことだろう。

関大師は早くから自己と陶芸を混同させ、陶芸の世界に入ると時が過ぎるのを忘れ、自身の居場所も忘れ、何もかも忘れただ陶芸に向き合ってきた。陶芸の創造に酔いしれた彼にとって、それがどれほど楽しいことであるか、精巧かつ精錬された彼の陶芸作品が物語っている。

歴史の伝承人というのは、歴史も往々に彼を記憶する。彼が一挙に全国重大科学研究賞、全国先進科学技術工作者、先進工芸美術工作者、また遼磁器の伝承人の称号を受けた時もそうだった。著名鑑賞家、『清明上下図』の鑑定者である楊仁愷氏の評価は、彼の偏りと夢中さ溢れる行為に対してさらに如実に注釈した。「関大師の功績は工芸上の突破のみならず、今日の電炭窯が柴窯に取って代わり、貴重な下絵付の伝承が途絶えたなかで、彼は毅然として危急存亡をかけた極めて困難な歴史任務を全うし、家族を携えて農村で生活を送る苦も顧みず、協力しながら土塊作り、型取り、絵付、釉塗り、窯に入れるまでのこの一貫した工芸を、すべて手作業で作り上げる。その古色溢れる精巧な芸術品を、再び観衆の前に現せば、異彩を放ち、中国の陶磁器芸術の栄誉を博したものである」

全身全霊を陶芸の世界にかける関大師だが、これまで絵画芸術への探求を怠ったことは一度もなかった。これは自身のこれまでの基礎的な技能だけではなく、陶芸と絵画の切っても切れない依存関係と、さらにはその時々に生じる書画創作への深い興味があったことも関係している。

誰も想像できないであろうが、関大師は収蔵大家であり、また鑑賞大師でもあるのだ。以前関大師から「私の収蔵には三部曲あり、一つは収集、二つ目が研究、そして三つ目がそっくりそのまま返すことだ」と言われたことがあった。十数年来、彼は5千件にも及ぶ文物と無数の陶器の破片を収集しており、これらは収集するだけで売ることはなかった。彼の収集の目的は物質文化の保護だけではなく、研究と精神文化の継承に寄与することが主な理由だった。

またさらに我々を感動させるのは、彼は自身の収蔵した2千件もの文物を無償で国家の博物館などに寄贈していることだ。

関大師と交流をする中で私が深く感じたことは、彼の事業に対する忠誠と、人に対する誠意は一貫しているということだ。私が知る中で、彼と国家級無形文化遺産の龍泉青陶磁器の伝承人である徐朝興大師と、浙江省の無形文化遺産である婺州窯伝承人の陳新華大師の関係も、志を同じくする人として形容できる。この2人からの誘いがあれば、彼はどんな時でも千里を越えて遼寧省から駆けつけるという。そして一緒に集い、友情を育みながら陶磁器について語る技を現場で教え始める。誰かが休むよう声をかけても、「忙しいのに慣れてしまって、今さら暇になっても却って落ち着かないんだ」と答え、その単純な言葉の中にも関大師の純粋な心が感じられる。このように人や事物に対する純粋さがなければ、品徳芸能の両立した大師が生まれることはないのだと考えさせられる。

哲人の話を想い出した。「大師はどこにいるのか。大師はきらびやかなステージの上に立っているわけでもなく、本当の大師は一般人の目に及ばない場所で、静かに修練と成長を遂げているのだ」と。関大師は普段から官僚や商人との交友は少なく、できれば多くの時間と精神を陶磁器や書画の収蔵に充てたいと思っているが、結局は自身の趣味や社会のための公益事業に費やすことが多いのである。これまで多くの善業を行ってきた彼だが、そのことを自分から少しも口に出そうとはしない……。

作者・趙　暢（中国作家協会会員、美術評論家）

今回訪日する芸術団団長の
関宝琮大師と妻の路桂筠さん

関大師の夫人であり、著名工筆画家である路桂筠さんは関大師の良きパートナーであり理解者。息子で『歴代陶磁器款識』を出版した関涛さん、娘で『中国陶磁器史』の著者である路筠さんと、ある約束を交わしている。それは、自身が亡くなった後、全ての所蔵品を国へ寄贈し、本当の意味での「そっくりお返しする」という理念を実現させることだ。

世界中で広く親しまれている中国の代表的な陶磁器

景徳鎮窯
（江西省景徳鎮市）

中国を代表する磁器。千年以上の歴史を有し、その造型が優美さや装飾の豊かさなどから世界的に評価を受ける。青花、玲瓏、粉彩、色釉は景徳鎮の四大伝統名磁器とされる。

景徳鎮市の大通り

景徳鎮は江西省東北部に位置し、中国陶磁器を代表する産地で知られる。街中でも磁器を使った装飾がみられ、路上に所せましと並べられた磁器の風景などが、「磁都」としての雰囲気を漂わせている。

遼磁
（遼寧等東北地方）

遼時代（916～1125年）の陶磁器。黒竜江省、吉林省、遼寧省、内モンゴルおよび河北省などの地で発見される。鮮やかな地方独特の彩色と民族風格が特徴。

缸瓦窯遺跡（内モンゴル）

写真は内蒙古自治区赤峰市にある缸瓦窯遺跡。約3～5平方キロの面積に覆われ、周りは山林に囲まれ燃料となる木々も豊富。特に契丹社会、文化、経済などに大きな影響を与え、陶磁器工芸のレベルアップなどにも、重要な意義を果たした。

宜興窯
（江蘇省無錫宜興市）

宜興市は江蘇省の西方にあり、この地で取れる紫砂泥を使って作られる紫砂壺が有名。1200度の高温で約72時間焼きあげた茶壺は、通気性に優れ、使うほどにお茶の香りを吸収し、味と香りをまろやかにする。

宜興の風景

宋の時代から1000年以上、茶器職人たちがその技術を磨いてきた街、宜興市。現在は中心部から車で20～30分の丁蜀鎮という町に職人や店が集まる。湖父鎮には、竹林で有名な竹海観光区があり、ここでは青々しい緑と静かさに包まれ、太湖からの渓水が年中流れ込み、天然のマイナスイオンをたっぷり感じることができる。

婺州窯
（浙江省金華地区）

婺州窯は青釉磁と乳濁釉磁、褐色磁、彩絵磁などを主とする。金華琅琊鐵店窯は2001年に国務院によって「全国文重点保護単位」に指定された。

婺州公園

婺州は今の浙江省の中西部の金華地区に位置し、範囲は衢州各都市を含む。唐代六代青磁産区の一つであり、上世紀50年代以来、文物主管部門が各地の婺州窯遺跡を繰り返し調査した結果、合わせて600カ所余りの窯を発見した。金華の特産物は、皮が薄く脂肪分が少ない金華ハムで、中国ハムの中で最高峰とされる。

陳新華

高級工芸美術師、中国陶磁器設計芸術大師、浙江省工芸美術大師、浙江省無形文化遺産「婺州窯伝統焼造技芸」代表的継承人、浙江省青瓷中青年十大名師。浙江省青瓷行業協会副会長、金華婺州窯陶磁器研究所所長。浙江省優秀文芸工作者、浙江師範大学客員教授。

関涛

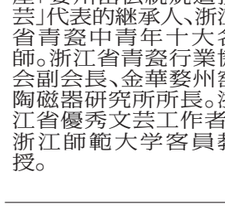
中国美術家協会陶芸委員会会員、中国陶磁器設計芸術大師、瀋陽理工大学芸術設計学院副院長、教授。遼寧省工芸美術行業協会理事、遼寧省美術家協会会員。

汪洋

中国陶磁器設計芸術大師、遼寧省工芸美術大師、江西省高級工芸美術師、画家。中華陶磁器大師聯盟理事、江西省青聯常務委員、景徳鎮市青年美術家協会副主席兼秘書長。

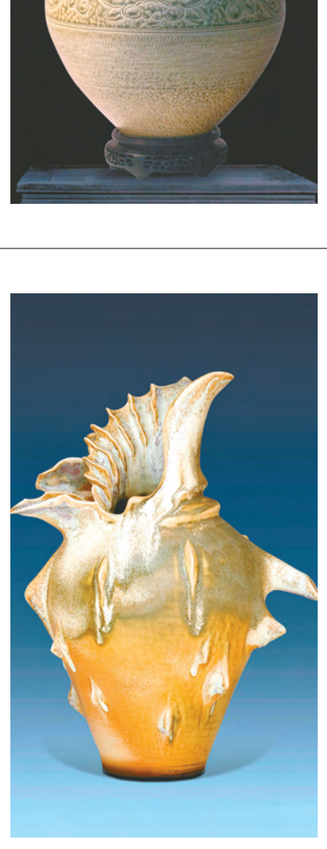
王忠偉

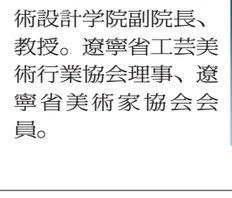
遼寧省雕塑協会副会長、遼寧省中華文化促進会常務理事、遼寧省美術家協会会員、遼寧省青年美術家協会会員、画家。



王妮娜

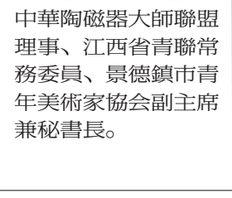
中国工芸美術家協会会員、遼寧省中華文化促進会理事、遼寧省美術家協会会員、遼寧省青年美術家協会会員、遼寧省雕塑協会会員、画家。魯迅美術学院講師。





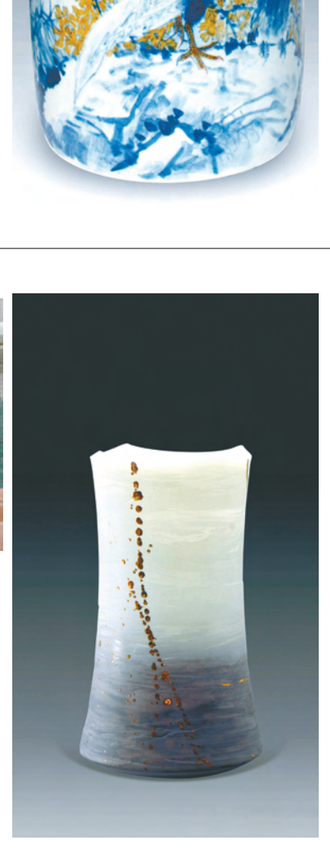
李程

2004年魯迅美術学院陶芸専門修士卒業。魯迅美術学院陶芸学科講師。著作に『陶磁器産品設計』がある。



銭麒光

2003年清華大学美術学院陶磁器芸術設計系卒業、2006年魯迅美術学院工業設計系修士、2008年ノルウェーオスロー国立美術学院交流学者、魯迅美術学院陶芸学科講師。



中国陶磁器絵画芸術ウィーク
～陶風磁韻―中国陶磁器絵画展

開幕式：7月28日（月）午後3時から来賓・主催者あいさつ、テープカット、絵画実演披露
展　示：7月28日（月）～8月1日（金）
午前10時30分から午後5時まで
（※最終日は午後4時まで）
開催地：東京中国文化センター
東京都港区虎ノ門3－5－1　37森ビル1階
主催団体：東京中国文化センター、中国駐日本観光代表処、全日本空輸、銀聯国際東京駐在員事務所、人民日報海外版日本月刊
協　力：関宝琮美術館、金華婺州窯陶磁器研究所
後援団体：中華人民共和国駐日本国大使館、新華社日本総局、日本外務省、日本国土交通省観光庁、日本政府観光局（ＪＮＴＯ）、公益社団法人日中友好協会、日中友好議員連盟、社団法人日中協会、一般財団法人日本中国文化交流協会、一般社団法人日本旅行業協会、社団法人全国旅行業協会、日本華僑華人文学芸術界聯合会、一般社団法人東京華僑総会